

天誅組

大岡昇平



天誅組

大岡昇平



天 誅 組

昭和四十九年五月二十八日第一刷発行

昭和四十九年八月二十日第三刷発行

著 者 大岡昇平

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社／東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号／一一二

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替／東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© Shohhei Ooka 1974, Printed in Japan 落し本・乱し本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文1)

目次

鄉
歸
198

庄屋敷
.....
240

旋風時代……………270

同志の人々……………297

浪士人別……………338

生麦事件始末……………376

木屋町三条……………400

率兵上京……………435

拳兵まで……………460

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・473

裝幀
栗津
潔

天
誅
組

脱藩

南国土佐といつても、高知県高岡郡檮原村の三月はまだ寒い。高知市の西方約七十キロ、伊予（愛媛県）との国境に接した、海拔四百五十メートルの山の中の村である。冬には雪が家の軒まで積ることがある。

須崎港から新莊川をさかのぼって、だらだら上りに、土佐西方山地に分け入った道は、葉山と船戸の間で、布施の急坂に会い、一キロの間に、二百メートルの高さを一気に上ってしまう。

そこからは芳生野、北川、檮原など、津野山の高原で、中村で土佐湾に注ぐ四万十の水源地帯の一つである。気候は寒冷、土地は痩せ、水田に乏しく、南国土佐の別天地を形づくっている。

この物語がはじまる明治維新前夜の文久二年（一八六二年）では、農民は多く紙の原料、楮草を植えて、作間渡世としていた。乏しい米作は年貢に取り立てられるから、農民の口に入るのは、粟、黍、椎の実だけである。

関西ではったい粉といえ、小麦をひいた粉のことである。土佐のはったい粉の原料は、トウモロコシである。明治以前は、黍であった。かわいた粉のままのやつを、紙をまるめた即製のスプーンをたくみにあやつって口にかきこむのが、檮原村の村民の特技の一つである。

村の経済は、紙の原料である楮草の栽培で支えられている。現在でも土佐紙は高知県の主要産業の一つで、一九六〇年代の統計では、手すき工場、機工場五十、年間移出金額は、六十億円に達している。維新直後藩札を刷って以来、紙幣には強くてつやのよい土佐紙が用いられて来た。戦後大量に発行された百円紙幣が硬貨に切り替った時、土地の製紙業は打撃を受けたが、やがて千円札、一万円札が百円札以上に印刷されたので、土佐の製紙業は繁栄を続けている。

製紙技術はもと中国から来たと推定されるが、早くから石見国柿本人麿の発明という伝説があった。その技術が周防灘を渡って伊予に入り、続いて土佐にもたらされた、という。従って伊予との国境に近い禰原村には早くから紙の製造が行なわれていたとしても不思議ではない。

慶長年間関ヶ原戦役の功により、掛川六万石山内一豊が長宗我部に替って、土佐二十四万石に移封された時、禰原村で押収した土地台帳には、二十枚以上の紙漉地が記載されていた。

徳川へ忠勤を上げむ山内家が、幕府への献上品ときめたのも紙であった。二代忠義の執政野中兼山が財源として目をつけ、藩の専売とした産業の中に、紙が入っていた。その政策の延長である御蔵紙の制度は、この物語のはじまる少し前、やっと廃止されたばかりであった。

現代の土佐紙の原料は、ほかの和紙と同じく、こうぞ、みつまた、雁皮であるが、この物語のはじまる頃では、主に楮草から作られた。しかし紙屋敷は、大抵は土地の富農の経営に属する。一般の農民は刈り取った楮草を、それらの紙屋敷か、或いは高知から買いに来る商人に売る。

ただし厳格な統制経済を敷いている土佐よりは、国境を越えて、伊予の商人に売る方が、値がよい。特に藩境に近い禰原村では、運賃の関係からそうなるのである。

しかし禰原の西方四キロの宮野々にはちゃんと関所があって、移出の品物の数量は記録される。嚴重に口銀、つまり輸出税が課せられて、国内でさばくのと、いくらか違わなくなってしまう。

う。第一、藩外移出は国内の需要をみたしてからでないかと許されないのである。

関所は品物だけではなく、人間の出入りを嚴重に監視するところである。

土佐は南に太平洋の荒海を控え、北に四国山脈をめぐらしている。薩摩と同じく藩境を閉じた国である。人口に比べて耕地が少ないので、土地經濟の藩政時代には、藩境閉鎖は必要とされる処置であつた。文久二年にはさらに他国人の出入国を監視する理由があつた。

嘉永六年（一八五三年）の黒船渡来以来、南に海を控えた土佐藩は、幕府の国防強化方針に従つて、強力な富国強兵策を推進しなければならなかつた。山内家の隱居容堂は、終始して公武合体による漸進主義者であつたが、それは必ずしも藩祖一豊以来の、徳川家の恩顧に報ゆるためではなく、それが土佐藩の利益であるという判断によるものであつた。

しかしもともと土佐の藩学には、山崎闇斎の垂加神道の流れを引き、皇室尊崇の伝統がある。文久年間から、幕府を倒して、王政復古を実現するほかに、夷狄の侮りを避ける道はないといふ、いわゆる尊王攘夷の過激派が、下級武士の間に生まれていた。これはその頃から日本全国に拡つた思想である。人間は藩主の家臣である前に天皇の赤子であると称して脱藩した志士の大群が、京都に集まつた。或いは各国を遊説して廻つた。徳川三百年の平和の間に発達した交通機關に乗つて、たちまち全国的な規模に達したのであつた。

文久元年、高知城下の下級武士市半平太を盟主として結成された土佐勤王黨員は、劍術修業に名を藉りて藩外に出た。多くの他藩の志士が藩境まで連絡に来た。土佐の国の北をかこむ四国山脈の隨所にある関所は、だんだん守りにくくなつていた。

文久二年三月六日の朝七時頃、檜原村から宮野々の関所に向う道をゆつくり歩いて行く一人の侍姿の若い男があつた。

せいはあまり高い方ではない。ぶっさき羽織に野袴のばかま、小さな荷を、肩からはすかに結んだ、軽い旅のいで立ちである。

顔かたちは、笠にかくれてよく見えないが、道を見晴らす山端の家の前で働いていた小百姓の伊作にはすぐわかった。三年来、櫛原村近在七カ村を管理している大庄屋、吉村のだんなであつた。

この年は閏年うるうだったので、季節は進まず、旧暦三月六日の櫛原村はまだ寒かった。山の北側のくぼみに残った根雪がやつと解け、梅はほころびはじめたばかりである。

伊作の家の庭からは、その山道が見渡せた。それは川向うの山際に沿っただらだら下りで、櫛原村から大越峠という低い峠を越えて四キロ、宮野々の関所へ通じる道である。その道を、早足で降りて来る旅装束の姿は、一キロほど先から、見えていた。

それがすぐ吉村のだんなだ、とわかったのは、かぶった笠のせいであつた。

それは侍がよくかぶる編笠と同じ形だが、黒い漆うるしが塗つてある。少し小形で、安っぽい感じがなくてもない。とにかくこんな笠をかぶる人間は、櫛原村では吉村のだんなのほかにはいないはずである。

吉村虎太郎は三年来、櫛原村とその枝郷えだじょう、宮野々、上成うわなる、弘野ひろの、西ノ川、川井、川口、房六の七カ村を管理する大庄屋である。前からこの地方では名を知られていた。

櫛原村の東七キロ、芳生野、北川村の庄屋太平の長男だった。十二歳で家督を相続し、十七歳で北川の庄屋の実務についてからは、楮草かじくさの集荷蔵を建てるために、官銀借用を藩庁に願ひ出たり、年貢軽減を愁訴したり、村のためによく働く庄屋として評判が高かつた。

しかし海岸地方の須崎浦の庄屋に転勤になり、その地に住む学者の間崎滄浪先生さそうろうや、高知の

城下で勤王家として名高い剣術師範武市半平太先生の家へ出入りするようになってから、少し人が変わったということである。

刀も三尺近く長いものを差すようになった。或る日集まりの席で、郡役所の下役から呼び捨てにされたのをいきどおり、戸波や高岡などの大庄屋七人の連名で、郡役所に訴状を提出した。須崎から下分へ転勤になったのは、そのためだという。

樽原村へ来た当座は下等米の太米で年貢代納を願ひ出たり、村の不意の出費に具えて石の貯金箱を作つて、庄屋屋敷の玄関へ据えついたり、うわさにたがわず、働き者の庄屋である証拠を見せてくれた。

ただ去年の春頃からよく高知の城下へ出て、十日、半月滞在することが多くなつた。ことに先月の十日には、なにか特別な御用だとかで、宮野々の藩境を越えて、長州まで出張した。そして二十七日に帰つたばかりであつた。

そのへんな黒い笠は、その時吉村のだんなの頭の上にのつていたものだった。

それは伊豆韮山の代官の江川太郎左衛門が、訓練兵にかぶせるために工夫したその名を取つて、「韮山笠」と呼ばれるのだという。

紙綴りで編んだものだから、不要の時はつぶして平らにしてしまえばよい。持ち運びに便利で、旅にはこれに限ると、吉村のだんなは、長州から帰つた晩、庄屋屋敷に集つた村の衆に自慢したそうである。

近頃上方や中国筋を往来する関東の浪士が持つて来たもので、吉村のだんなはそれをこの前の旅行の時、三田尻で出会つた浪士から、貰つたのだという。

吉村のだんなはそういえば、前からあれでなかなかのおしゃれで、庄屋に許された絹の着物を

長めに着て、いつも雪駄せうたをはいていた。須崎浦にいたころ、雪駄のまま郡役所へ上り込んで、五日間の謹慎のお咎めを受けたこともあったという。

従つて吉村のだんなが他国から持ち帰った笠を自慢なさつても、別に不思議はなかった。

ただ伊作としては、これで十日の間に吉村のだんなが二度も家の前の道を通るのを見たことになる。そうしげしげと国をお出になる、なんの御用があるのか、と少し気がかりである。

伊作は思はず立ち上り、五、六歩前へ進んで、敷地の端はしれまで行つた。そしてじつと動いて行く吉村のだんなの姿を眼で追つた。向うでも伊作に気がついたらしい。歩きながら右手を上げた。そういう気さくな吉村のだんななのであった。

伊作はすぐお辞儀を返したが、それだけでは気がすまず、そばまで行くことにきめた。そしてなぜ、なんの御用で、こうしげしげ関所をお越えになるのか、きいてみようと思つた。家の前の坂を駆けて降りた。

その時、彼は禰原の方角に馬の蹄の音を聞いたのである。

その方はこの道を挟む低山がゆっくり大越峠へ向つて高くなっているが、その上にさらに高く、頂上に雪を残した四国山脈が、遠く朝の陽を受けて輝いている。その山を背景にした坂道を、一散に馬を飛ばして来る一人の長身の男の姿も、伊作はすぐ見分けることが出来た。宮野々のほか三カ所の枝郷の肝入りで、宮野々の関所の番頭ばんとうを勤める玉川のだんなである。

(なにかあったのかな)

伊作が思はず足をとめて、川に渡した板橋を渡りかねている間に、玉川のだんなはみるみるうちに近づいて来た。吉村のだんなが立ちどまって、笠をあげて、笑うのが見える。しかし玉川のだんなの方はにこりともせず馬から降りた。ずかずかと歩み寄つた。

玉川のだんなは六尺豊かな方であるから、吉村のだんなの前へ立つと殆んど首だけ高い。その言葉は、伊作のところまでは聞こえなかったが、様子では、なにか容易ならぬことのように見える。

しかしなにか答える吉村のだんなの顔から、笑いは去らない。

伊作は庄屋衆二人の話に立ち入ってはわるいと思ひ、流れにかけ渡した板の手前に立ち止まってしまったのだが、もしこの時吉村虎太郎と玉川壮吉の間に交わされた会話を聞いたら、かなり驚いたにちがいない。

「おんし、また脱藩する気か」

と玉川はいったのである。

「いや、脱藩ではない」と吉村は笑いながら答えた。「朝から脱藩する度胸はない」

「しかし旅仕度をしているではないか」

「いかにも、宮野々から九十九曲を越える。長浜から中ノ関へ渡る。萩へ行つて、長州の同志久坂義助どのに会う。しかし手形はこれ、ここに持っている」

そういうながら、吉村は懷をさぐつて、一枚の木札を差し出した。番頭を勤める壮吉には改めずともすぐにわかつた。藩の焼き印の入つた、正規の番所通過証であつた。

「どこで手に入れた」

玉川はにがにがし氣な表情をくずさずにいった。

「武市先生にいただいた」

「なに、武市先生？」

玉川は信じられぬという顔をした。

「そんなはずはない、先生はおんしの亡命に反対されたはずだ。同じ土佐勤王党に属するわれわれとしては、あくまで藩に止まって、藩論を勤王に統一するのが、第一義であるはずだ」

武市半平太、号は瑞山、剣技をもって仕えたが、早くから勤王の志あり、井伊大老暗殺を期に高まった気運に呼応して、文久元年土佐勤王党を組織した。血判加盟する者百九十二人、吉村虎太郎、那須信吾等禰原の番人庄屋もみな加盟していた。吉村が先月萩へ行ったのは、武市から久坂へ宛てた手紙を届けるためだった。

「ところがそうではない」と、吉村はなおも笑いながら答える。

「おれは高知城下から、昨夜帰ったばかりだが、吉村は功名心強くして、止むべからず。思うようにやらせるほかはない、といわれた。そしておれはむろん、これから直ちに京都に上り、この度の驚天動地の壮挙に参加するつもりなのだ」

吉村の口調はだんだん演説口調になって来た。

「おんしも知つての通り、薩摩の後見職久光公は、一千余名の精鋭を率いて、まもなく上洛の途である。名目は参勤交代であるが、途中京都に立ち寄って、攘夷の詔を乞い、参勤の人数を直ちに討幕の軍として、箱根に進める。王政復古を実現する、千載一遇の好機だ。この際、土佐の僻地に因循して、藩論統一などと呑気なことをいつている時ではない。先駆けするは諸侯と庄屋の任だ。——と武市先生に申上げたなら、それでは好きなようにするがよい、と申されて、この手形を周旋して下さったのだ」

しかし玉川は説得されない。

「さじを投げられたのが、わからんか」

「おかしいことをいうな」吉村は少しむつとしたらしかった。「われらこの度、脱藩はあだやお